

【第34回大会個別発表抄録】

強い父親を構成するためのユーモア使用に関する理論的研究

—家族療法的観点から—

二本松 直人 (東北大学大学院)・吉谷地 康平 (岩手大学大学院)
萩臺 美紀 (東北大学大学院)・奥野 雅子 (岩手大学)

日本は古くから父権的な家族形態であったため、一昔前は父親が強いというのはごく当たり前だった。しかし近年では、社会の変化に伴い多様な家族形態が出現している。その中で、「父親不在」といった父親の存在が極度に薄まることによって発生する問題が指摘されるようになった(田村, 1997; 長谷川, 2006)。「父親不在」とは、父親が物理的に不在であることと、物理的にはいるものの、心理的・機能的にはいない状態を指す(尾形, 2011)。父親の影響力や、父親の家族内における良好な関係性の構築が子どもの適応などに対して重要な役割を果たしているとされている(田村, 1997; 前島・小口, 2001; 花嶋, 2007; 中見・桂田, 2008)。つまり、不適応的な父親不在の家庭にならないためには、「弱い」父親ではなく「強い」父親である必要がある。本研究では、威厳のあるといった特性的な強さではなく、長谷川(1991)が主張している構成主義の立場から、コミュニケーションによって形成される存在感の強い父親像に着目する。強い父親像を形成するような父親の家庭内における有効なコミュニケーション参加としては、ユーモアによる関わりが考えられる。

ユーモアとは、面白いと感じる心的過程、面白いものを感じさせるものなどのことをいい(Martin, 2007 野村・雨宮・丸野監訳 2011)。ユーモアには、家族内コミュニケーションを安定させる機能も持っている。家族内で笑ったり、ユーモアを用いたりすることは、家族内の安定と適応に関連している(Driver et al., 2012)。そして、本研究ではユーモアを用いて家族を治療する家族療法的観点を用いて(長谷川, 1991; 若島・長谷川, 2000)、父親不在にならないような具体的なコミュニケーションを提示することを目的とする。そして先行研究に基づき、母子が父親への否定的イメージを共有している「愚痴共有タイプ」と、父親を育児に参加させないような「母親独走タイプ」の仮想事例を作成・検討した。

「愚痴共有タイプ」では、父親は否定的に関わるのではなく、肯定的かつユーモラスにコミュニケーション参加をすることで相互作用的に強い父親像を構成しながら、母子と適切な対人関係を構築できるだろう。例として、臭いについて批判された父親が、むしろ「洗濯機2つ目買おうか?」と便乗することが挙げられる。一方で、「母親独創タイプ」では母親の過保護もしくは母親にとって異常に見えるような子どもの行動のどちらかを、父親がユーモラスにリフレーミングして伝えるという関わりをすることが重要である。例えば、母親の動機を褒めながら、子どもの行動を自分と比較して普通の現象であるとみなす。ただし、あくまで仮想事例を用いた理論的検討であるため、今後より現実的な検討が求められる。